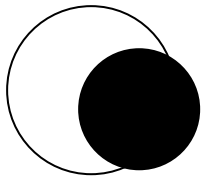


平成 21 年度事業報告



ひとはくトピックス

1 加東市と協力協定を締結

ひとはくは加東市の推進する「まちまるごとミュージアム事業」に協力するため、加東市との間で協定を締結しました。その調印式が2009年7月13日に行われ、中瀬勲副館長と山本廣一市長の出席のもと協定書が交わされました。「まちまるごとミュージアム事業」とは、加東市の3町(滝野町、社町、東条町)合併3周年記念事業の一環として3年間の継続事業として実施されるもので、この事業をひとはくは加東市と連携し、その推進を支援することとなりました。

2009年度は「昆虫」を主テーマに連携事業を実施しました。夏休み期間中の8月1日～8月9日にはモルフォチョウを中心に展示会を開催しました。展示会に訪れた人たちは美しい蝶に感激、評判は上々でした。また、この展示会のイベントとして「子ども大昆虫調査隊」(7月29日)が播磨中央公園で催されました。このイベントに参加した子どもたちの絵画作品も同時に展示されました。冬期には、加東市の小学校教員による環境学習プロジェクトに協力し、加東市の小学生・中学生による環境学習の成果作品を展示しました。冬の展示会(12月20日～27日開催)では、子どもたちの作品の中から優れた作品を選出し、第一回加東市ノーベル大賞が授与されました。ひとはく研究員が授賞作品の選定委員を務めました。12月20日の大賞授与式には、環境学習に熱心に取り組んだ児童とその保護者が多数出席されました。



協力協定調印式の様子



夏の展示のオープニングセレモニー



子どもたちが描いた昆虫の絵の展示



冬の展示の様子

2 今年のひとはくは「恐竜大作戦！」

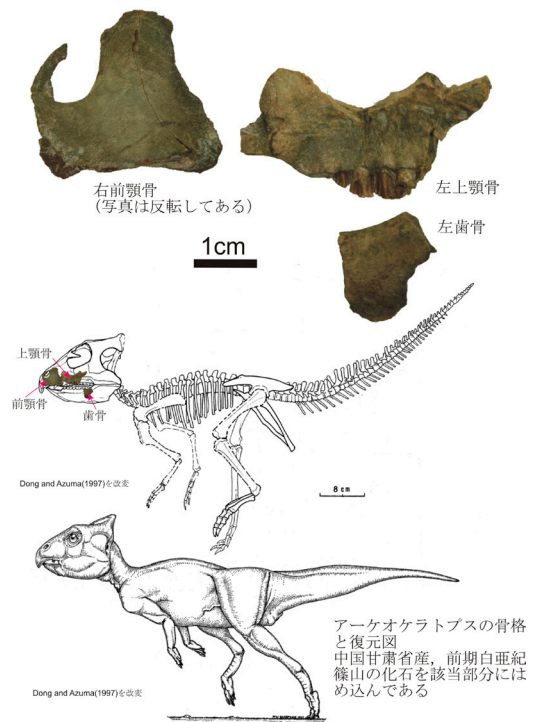
2009年度は「ひとはく恐竜大作戦」と銘打ち、恐竜をテーマに演示等の多数のイベントを開催しました。大作戦の特別企画として、上半期には「丹波の恐竜を知ろうー3年間の発掘報告ー」(2009年4月25日～5月31日)、下半期には「竜と獣の道～太古の兵庫を歩いた生き物たち～」(2009年10月24日～2010年1月27日)を催し、各種イベントはこの特別企画期間中に研究員、生涯学習課指導主事やフロアスタッフによって実施されました。上半期は新型インフルエンザの影響もありやや盛り上がりには欠けましたが、下半期は期間中に篠山市での「角竜類化石の発見」(11月26日記者発表)や、三田市在住の小学生による「カエル化石の発見」(12月1日記者発表)がマスコミに大きく取りあげられたこともあり、イベントはいずれも大にぎわいでした。

恒例のひとはくフェスティバルも今年のテーマは「恐竜」でした。恐竜疾走！コンテスト、恐竜〇×クイズ、君も発掘隊員！！丹波の恐竜化石を探し出そう、超かんたん！化石レプリカづくり、恐竜骨パズルなど、楽しいイベントが盛りだくさんでした。

調査では、今年度は第4次発掘調査が行われました。今回の発掘調査では、恐竜もしくはカメのものと思われる卵殻の化石や、丹波竜の胴椎の一部と思われる化石が発見されるなどの成果がありました。次回の発掘にも期待がかかります。



篠山市の角竜類化石
(11月26日記者発表資料)



3 佐用町昆虫館との連携協定締結と平成 21 年台風 9 号災害への支援

兵庫県立人と自然の博物館と佐用町昆虫館は、生物多様性の保全、環境学習・生涯学習の推進、地域づくりに寄与するため、2009年8月に連携に関する協定を締結し、いわば「姉妹館」として、互いの交流・連携を広く進めることとしました。佐用町昆虫館は、豊かな自然環境の中にあり、生きた昆虫を観察できる体験型施設であり、連携によって、ひとはくに乏しい機能を補強することが期待されます。

ところが、2009年8月9日、昆虫館にて協定書調印式が行われた日の夜、台風9号による豪雨で、昆虫館は敷地が土砂に埋まり、休館を余儀なくされました。この水害では、佐用町のみならず、宍粟市などの西播磨地域を中心に、大きな被害を受け、ひとはくも、独自にプロジェクトを立ち上げ、さまざまな支援活動を行ってきました。「佐用町昆虫館」の復興支援としては、ひとはくの岩槻館長、中瀬副館長が、NPO法人こどもとむしの会(内藤親彦理事長)と共同で、「佐用町昆虫館復興義援金」を立ち上げ、募金活動を行いました。また、昆虫館で飼われていたミツバチの救出、貴重な植物ハリマイノデの救出などを行ってきました。

さらに、災害の直後から、研究員が、博物館実習の学生さんの協力も得て、被災状況を現地取材して速報し、10月1日から11月23日にかけて、「がんばれ！佐用町」展として、佐用町各地の被災状況を写真パネルで紹介し、佐用町昆虫館での被災資料も展示しました。宍粟市一宮町では、豪雨によって河床が浸食されることで7千年から1万年前の泥炭層が現れました。堆積物には、大木の幹や種子、昆虫遺体などが含まれ、研究員らが今後分析を進め、大昔の環境を知る資料として、活用していきます。その他にも、洪水で流出した倒木の樹種調査や、千種川の河川改修へのアドバイスなど、専門性を活かした支援活動を行いました。



4 『企画展「初夏の鳴く虫と巡回展～ぎっちゃん君、参上！～」を開催』

「鳴く虫の巡回展」の話は、橿原市昆虫館が2007年に行った第18回特別展「バッタ・コオロギ・キリギリス」(8月1日～10月21日)に始まります。高価で有用な『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』を刊行したばかりの日本直翅類学会は、その宣伝を兼ねて、多数の生態写真や鳴く虫関連の民具の提供・その他の協力を申し出ました。この特別展を元に、「NPO 西日本自然史系博物館ネットワーク」が調整役となり、写真パネル主体の巡回展がつけられました。

2008年4月28日にNPO 西日本自然史系博物館ネットワーク所属の6館(伊丹市昆虫館、大阪市立自然史博物館、きしわだ自然資料館、兵庫県立人と自然の博物館、多賀町立博物館、橿原市昆虫館)が集まり、日程の調整等を行いました。この展示物を利用しながら、各館独自の展示を出し、その一部を巡回展の中に組み入れて「進化型巡回展」を目指していくという新しい試みです。

ひとはくの展示は、他館が注目しない初夏の鳴く虫に焦点をあてました。鳴く虫は春先から鳴き始め、初夏・夏・初秋と増えていくので、「初夏の鳴く虫と巡回展」と題し、初夏から夏休み一杯をカバーして



2009年6月6日～8月31日の開催としました。サブタイトルは、ひとはく連携活動グループ・鳴く虫研究会「きんひばり」がアイデアをひねり出した「ぎっちゃん君、参上!」です。「ぎっちゃん君(左図)」は、夏の鳴く虫の代表であるキリギリスの鳴き声「ギー、チョン」からつけました。総務課の川東丈純氏によるキャラクターイラストは、イメージアップにつながり、当館の独自性を強調しました。県立美術館との連携で作成された3mの巨大キリギリスは、オープンセミナー「巨大キリギリスをつくろう」で採色され(左下写真)、巡回展の後にフローラ88の空き店舗スペースに貸し出されました。また、鳴く虫を売り歩く「鳴く虫屋台」の再現モデルも(右下写真)、ひとはくの後に開催された多賀町立博物館と橿原市昆虫館に貸し出され、好評を得ました。



5 岩槻邦男館長が瑞宝重光章を受章

当館の岩槻邦男館長が、2009 年秋の叙勲にて瑞宝重光章を受章しました。瑞宝重光章は「国家または公共に対し功労があり、公務等に長年従事し、成績を挙げた者」とされています。館長は長年、シダ植物の系統と分類に関する研究や、東アジア・東南アジア植物相の研究、植物多様性の保全に関する研究などで多くの業績をあげてきており、日本学術会議委員、国際生物科学連合日本代表、(社)日本植物学会会長、日本植物分類学会会長、(社)日本植物園協会会長、国際植物園連合会長、学術審議会専門委員、環境保全審議会委員など国内外の要職を歴任してきました。これら要職やひとはく館長として、広く社会に対して植物への理解を深める教育・学習や施策に貢献し、書籍や講演などを通して生物多様性の大切さや持続的利用に関する啓蒙活動を続けてきたことが評価されたものと考えられます。

6 デジタル紙芝居など、フロアスタッフのオリジナルコンテンツが充実

ひとはくでは来館者サービスとして、事前申込みなしで参加できるオープンセミナーを毎日開催しています。とくにフロアスタッフのオープンセミナーは、2009 年度 765 回、のべ 16,818 人の方々に参加いただきました。なかでも人気なのが、大きなスクリーンで上映するデジタル紙芝居です。物語の構成、作画は、すべてフロアスタッフのオリジナルで、研究員にアドバイスを受けて完成させていきます。今年度も新作として「丹波の恐竜たんたんのひとはくナイトミュージアム」が「ひとはく恐竜・化石大作戦！」開催にあわせて完成しました。丹波市で発見された恐竜「たんたん」が館内を散歩しながら展示の見どころを楽しく案内するもので、物語の後には丹波の恐竜化石や化石のクリーニング作業などについての解説もあります。オープンセミナーとしてだけでなく、子どもを含む来館団体からのリクエストに応じて特注セミナーとしても 28 回実施しました。

このほか、新しい企画として、1 日中いつでも参加できるワークショップ「フロアスタッフと遊ぼう！スペシャル」を開催しました。内容は、「恐竜おりがみ」、「恐竜バルーンアート」、「恐竜ペーパークラフト」や「とっても簡単！化石のレプリカづくり」、「とびだす！恐竜カードづくり」、「パタパタ・プテラドン」など、22 回 1,779 人の方々に楽しんでいただきました。スタッフは受付業務から来館者対応、セミナー業務、コンテンツ制作まで幅広い仕事をこなしながら、日々研鑽を重ねて新しい来館者サービスを創出しています。

7 小学校3年生「環境体験学習」への本格的な取り組み

「環境体験学習」は、県下の小学校3学年で実施されている体験型の環境学習で、年3回程度の地域での自然体験活動をとおして環境の大切さを知る学習です。平成19年度より一部研究指定校で実施されていたものが、平成21年度県下公立全小学校805校で実施されました。ひとはくでは、事業実施当初より講師派遣や活動内容の相談等の支援を行っていましたが、全校実施にともない、生涯学習推進室や生涯学習課を中心に、来館団体に対しても「特注セミナー」等でも積極的に支援を行いました。その内容は、調査方法の指導（昆虫採集、植物観察、川の生き物調査等）や地域で実施された体験活動の考察、調査結果に対する専門的な総括等多岐に渡っていました。

平成21年度に来館した小学校数は210校（他府県、国立、私立を含む）で、そのうちの81校（38.6%）が「環境体験学習」（小学校3学年）による来館でした。更に、81校中58校（71.6%）が、学校の要望に応じて行った「特注セミナー」を受講しており、その内訳は、植物関係21校（36.2%）、動物（川の生き物等）関係19校（32.8%）、昆虫関係14校（24.1%）、地球科学関係2校（3.4%）、総合的な内容2校（3.4%）でした。また「特注セミナー」の形態は、講義形式が38校（65.5%）、実習等体験学習が19校（32.8%）、展示解説が1校（1.7%）でした。

セミナーの主なタイトルは以下のとおりです。

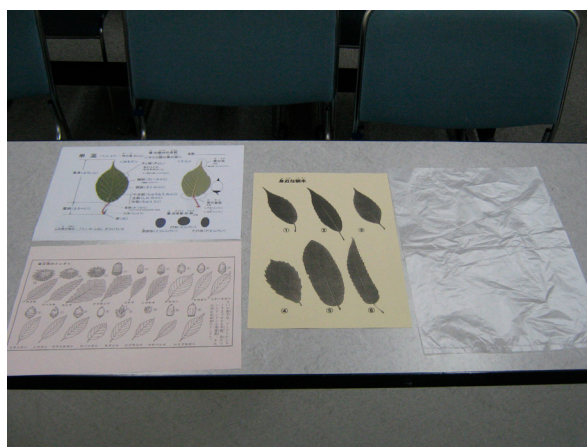
【植物分野】里山を観察してみよう、エドヒガンザクラについて、植物標本作成、植物観察のコツ

【動物（川の生き物等）】ビオトープ、カエルの生活から身近な水環境を考える、カワウの話、メダカ発表会、封入標本づくり

【昆虫】昆虫の観察について、ホテルについて、虫とりペナントレース、虫ビンゴ

【地球科学】丹波の恐竜化石について

【総合的な内容】身近な自然について、環境に関するはなし



8 「共生のひろば」発表会、共生のひろば展も好評。

発表数 58 件、聴講者 330 人！

人と自然の博物館では毎年 2 月 11 日に、各地域でひとはくの研究者と連携して様々な活動を行っているグループや個人による日頃の研究・活動の成果を発表する「共生のひろば」を開催しています。今年で第 5 回を迎え、16 件の口頭発表と 42 件のポスター・作品が出展されました。総勢 330 名の参加者が集まり互いの成果についての情報交換を行いました。発表会後の茶話会で行われた表彰式では、例年の館長賞、名誉館長賞に加え、審査員特別賞と会場からの投票によって決まる会場注目大賞も授与され、受賞者は多くの参加者からの拍手を浴びていました(下表参照)。またポスター・作品については、当館 2 階の企画展示室において 2 月 11 日から 4 月 4 日に実施した「共生のひろば展」にて展示し、2 月 11 日に訪れることができなかった多くの来館者に対しても情報発信する場を提供しました。

第 5 回 共生のひろば 受賞者一覧

館長賞	口頭	ミスジナガハグサ(イネ科イチゴツナギ属)の謎2 —ミスジナガハグサとナガハグサの相違点—	西野雅満(植物リサーチクラブ・ひとはく地域研究員)
	口頭	コヤマトビケラの生活史—幼虫集合行動の目的を探る—	松岡純平・原口太志(兵庫県立福崎高等学校生物部)
	ポスター	NPO 法人 日本ハンザキ研究所 が進める環境教育の実践	田口勇輝・栃本武良(特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所)
	ポスター	丹波地方の溜池・湿地における湿生・水生植物の植生	松岡成久(植物リサーチクラブ)
名誉館長賞	口頭	水生寄生蜂 <i>Apsilops</i> sp. (ヒメバチ科:トガリヒメバチ亜科)の生活史と寄主探索行動	長崎 撰(豊中市立第十四中学校)・平山智子(神戸女学院大学)
	口頭	学校のプールにいたミジンコ(<i>Daphnia pulex</i>)の行動と生態～耐久卵の殻の意味を中心に～	川底英剛・西 拓樹・木嶋崇人・神野泰淳・美間克也・伊藤 毅・高嶋志門(大阪府茨木市立三島中学校科学部)・佐々木宏展(同 顧問)
	ポスター	エコトランクで楽しく遊ぶ！学ぶ！	赤阪幸司・芦田博貴・遠藤健彦・大島達也・神谷亜依・高島基郎・田中洋次・南部恭宏・藤長裕平(兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科)
	ポスター	摘み菜ご飯、できたよ！ おいしいな！	西浦睦子・入口紀代里・鈴木久代・長町美幸・松浦百合・矢野直子(ひとはく連携活動グループ NPO 法人さんぼくらぶ)・平谷けいこ・社ひとみ(摘み菜を伝える会)
審査員特別賞	口頭	15年間で著しく減少した川西市加茂地区のヒメボタル	畚野 剛・市原敏彦・井上道博・恵須川満延・澤山輝彦・中本二郎・平田信活(川西自然教室)
	口頭	ムコのビオトープづくり活動を通して ～いのちをかんがえる～	池野知行・小南亘輝・北川達也・紀之内拓巳・坪田祐典・松矢一輝・勝井悠生・原 悠平・室山容一朗・大原創一朗・辻元凌太・門田欽大・芝本光希・小南智輝・郡山佳太・松下 修・藤奈央樹(武庫小学校 さかな委員会及び担当者)
	ポスター	六甲山におけるキノコの長期観測データを用いた出現種数の推定および気象要因との対応分析	森田綾子・大西里佳・田中友香里・鷲見秋彦・中川湧太(兵庫県立御影高等学校)
	ポスター	「高校生と学ぶ」～植物画を描く上での自立をめざして～	田地川和子・貴島せい子・肥田陽子(ひとはく連携活動グループ GREEN GRASS)
会場注目大賞	口頭	ムコのビオトープづくり活動を通して ～いのちをかんがえる～	池野知行・小南亘輝・北川達也・紀之内拓巳・坪田祐典・松矢一輝・勝井悠生・原 悠平・室山容一朗・大原創一朗・辻元凌太・門田欽大・芝本光希・小南智輝・郡山佳太・松下 修・藤奈央樹(武庫小学校 さかな委員会及び担当者)
	ポスター	丹波地方の溜池・湿地における湿生・水生植物の植生	松岡成久(植物リサーチクラブ)

9 NPO 法人 人と自然の会主催「ドリームスタジオ」が 150 回を超える

NPO 法人 人と自然の会は 1994 年、ボランティア養成講座をきっかけに発足したグループで 1999 年には NPO 法人格を取得し、同年 11 月にはひととはくと協力協定を結びました。ひととはくと連携グループ第 1 号といえるでしょう。人と自然の会は 1996 年にはじまった「ミュージアムフェスティバル（現在のひととはくとフェスティバル）」で「手作り工作」「ネイチャーターリング」「花の教室」を実施しました。はじめて来館者を相手に実施したオリジナルプログラムでした。それが大成功し、「喜んでもらえた！ 楽しい！ もっとやりたい！」ということで、

1997 年から毎月第 3 日曜に実施するようになったのがボランティアデー（現在のドリームスタジオ）です。

第 1 回のテーマは「博物館の近くに住むカエルたち」「のぞいてみようミクロの世界」でした。「何をしよう」からはじまって、当日の運営、報告までこなしました。どんなプログラムがあったかは人と自然の会のホームページ（参照：<http://ukiuki.michikusa.jp>）でご覧になれます。「動物の名前のついた植物たち」、「さわってみよう地下からの贈り物」、「春だ！ つくしだ！ テントウムシだ！」、「紙すき！ わらすき！ 大好き！」、「おいも 3 兄弟 もちをつくろう」、「しゃぼんだまほりでー」、「こんなものもお茶になる」、「みつばちになってみよう」、「ダチョウのたまごでアクセサリー」、「春を待ちわびた虫たち」、「音で遊ぼう ふく・ふる・たたく」…多種多様、奇想天外で多くの来館者を楽しませています。

2000 年からは第 3 日曜日を「博物館の日」と名づけてひととはくとしてもイベントを集中させるようになりました。そんなさまざまな歴史を刻んだドリームスタジオが 2009 年 11 月 15 日第 150 回（テーマ「森のクラフト」）を迎えました。ドリームスタジオの蓄積が生んだ「博物館の日」は、ひととはくにとっても特別な日になっています。



ドリームスタジオの様子は毎回黒い画用紙にはって 4 階に掲示



みんなで集めた 50 種類以上の木の実をつかったリースづくり（第 150 回「森のクラフト」）

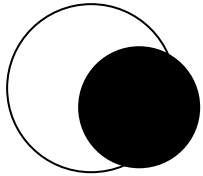
10 あしかけ 11 年、「兵庫県産維管束植物目録」が完成しました！

標本にもとづく植物目録として、1999 年から毎年、研究紀要「人と自然」に連載してきた「兵庫県産維管束植物」が、2009 年 12 月発行の同紀要に掲載された第 11 報により完結しました。大量の植物標本をもとにして、再同定を行いながらデータの入力、ソーティングをへてリスト化し、植物のグループごとに分けて出版してきたため、11 年間という多大な時間を要しました。この目録は兵庫県に産するシダ植物、裸子植物、被子植物のすべての種を掲載しており、亜種・変種・品種をあわせて全部で 191 科約 2,800 分類群を記録しました。これにより県内の植物相の概要がわかる資料となりました。

これまで兵庫県の植物を最も多く掲載している文献に「兵庫県植物目録」(紅谷進二(編) 1971 年)があり、そこには約 2,500 の分類群が記録されています。当時から約 40 年の間に 300 の分類群が新たにわかり追加されたこととなります。新発見のものも多いが、従来の分類から変更されたものや新しく帰化した植物が多く含まれています。参照した植物標本は、おもに人と自然の博物館と頌栄短期大学に収蔵された標本で、合せて 20 万点以上はあると思われませんが、そのうちリストに引用されたのは 6 万点ほどになります。標本の産地は県下全域にわたっているが、採集者のほとんどは専門家でなく一般県民です。多くの人たちが県内各地で植物を調べ、その際の標本と得られた知見が博物館に集積されたのです。これがなかったら本目録は完成しなかったといえます。

本目録の利用に関して、数年前から兵庫県下の植物を対象にした報告・記録に本目録を引用する例が増えてきています。昨年度、兵庫県が作成したレッドデータブック(兵庫の貴重な自然)植物編の第 3 版の編集過程で、種の選定やランク付けを検討する際に本目録の情報が大いに役立ちました。目録が完結し、今後はさらに利用が増えるものと期待できます。





平成 21 年度のタスクフォース事業報告

タスクフォース(組織群)について

従来の組織群とは別に平成 20 年度から導入したものである。各タスクフォースは、短期の課題を達成するために結成したものである。構成員は、リーダーおよびサブリーダー、その他であり、人員は、実情に応じて年度途中でも変更可能にしている。また、新たなタスクフォースを発足できるようにしている。平成 21 年度は 6 つのタスクフォース(生物多様性戦略、恐竜・化石、マーケティング、グローバル・プログラム、ジオ・パーク、地域再生人材創出)が結成された。

■ 生物多様性 タスクフォース

(1) 生物多様性についての普及活動および県・市町・企業に対するシンクタンク活動

・市民グループの活動地における生物多様性戦略の策定を 2 件、支援した。また、兵庫県下の市町(神戸市、明石市、西宮市など)の戦略策定または戦略策定に向けた活動を支援した。

(2) 当館の生物多様性に関わる事業計画の立案と 2009 年から 2011 年にかけての実践

・年度当初に、ひとはくが実践できる生物多様性関連事業のメニューを経営戦略会議に提示し、2010 年度にそれらが推進室等によって実践される方針が確定した。

(3) 委員として RDB 改訂作業等への参画

・ひとはくの多数の研究員が、ひょうご戦略の推進に関わる委員会に参画した。

(4) 生物多様性ひょうごネットワーク(仮称)の形成支援

・平成 22 年度に生物多様性をテーマとして団体間の連携を活性化させるための活動紹介冊子の作成計画を策定した。

兵庫県下の市町(神戸市、明石市、西宮市など)の戦略策定または戦略策定に向けた活動を支援したことで、今年度の目標は概ね達成できた。市民グループの活動地における生物多様性戦略の実例を示すことができたことにより、次年度以降の活動にある程度の道筋をつけることはできた。ひょうご戦略の推進については、県自然環境課との連携を密にして実施している。ネットワークの形成については、市民グループの意見も集約しつつ慎重にすすめる必要がある。市民グループ版の生物多様性戦略の策定件数がやや低調であったため、今後派遣数増をめざして支援活動を活発にしたい。

■ 恐竜・化石 タスクフォース

(1) 第 4 次発掘調査の実施

・平成 21 年 12 月 8 日～平成 22 年 3 月 24 日。工事完了、ボランティア参加による調査(平成 21 年 1 月 9 日～平成 22 年 3 月 5 日、のべ 56 日間)、ボランティア参加のべ人数 494 人(登録は 58 名)、確認された化石の点数は 2667 点だった。

(2) 化石クリーニング作業、および調査研究の推進

・クリーニング作業は順調で、ティラノサウルス類の歯、角竜類化石、カエル化石の発見などにつながった。これらに基づいた学会発表が 5 件(うち 2 件は活用系)だった。

(3) 国際シンポジウムに向けた準備

・国際シンポジウムに向けた方針を決定し、開催は平成 24 年度に変更した。毎年フォーラムを開催し、平成 22 年度は 12 月に開催予定である。

(4) 恐竜化石を活かした教育普及活動の充実

・発掘体験指導員制度を平成 21 年 7 月より導入し、現在 16 名が登録しており、丹波および淡路で発掘体験事業等を展開している。
・丹波市上久下地域づくりセンターでセミナーを実施した(6 回実施、参加者数 計 95 名)。
・出版事業の支援:「丹波竜、太古から未来へ」(神戸新聞総合出版センター編)の監修およびマンガ「奇跡の恐竜、丹波竜」(漫画:所 十三、丹波市発行)への協力を行った。

(5) 地域研究員の育成と各種事業へ参画促進

・地域研究員の新規登録人数は 15 名だった
・化石発掘体験・調査事業(2009 年 7 月～2010 年 2 月)は開催数 50 件で、参加者数 958 人であった。

(6) 展示および演示コンテンツの充実

<展示物>

・ベロキラプトル骨格標本の追加、レプリカ作成などを行った。

<演示コンテンツ>

・研究員による演示:「かんたん! 恐竜の歯のレプリカ作り」(6 回実施、参加者数 103 人)、「君も発掘調査隊員!!丹波の恐竜化石を探しだそう(発掘体験)」(5 回実施、参加者数 199 人)などを開催した。
・フロアスタッフによる演示(上半期 32 回、参加者数 687 人;下半期 111 回、参加者数 4063 人)などを開催した。

(7) 三田の化石発掘体験広場の活用

・トライやるウィークで三田の化石発掘体験広場を活用した(平成 21 年 6 月)。

(8) 研究成果や事業の新聞等への報道推進

・第 4 回丹波恐竜化石等発掘連絡協議会の開催について(平成 21 年 11 月 25 日、資料配付)
・「原始的な角竜類の頭骨破片の発見について」(平成 21 年 11 月 26 日、篠山市役所)
・「カエル類化石の発見について(平成 21 年 12 月 1 日、丹波の森公苑)
・第 4 次発掘調査開始(平成 21 年 12 月 8 日、発掘現場)
・第 4 次発掘調査、発掘ボランティア参加による発掘開始(平成 22 年 1 月 9 日、発掘現場)
・第 4 次発掘調査の状況について(平成 22 年 2 月 4 日、発掘現場)
・第 4 次発掘調査の状況について(平成 22 年 2 月 18 日、発掘現場)
・第 4 次発掘調査の結果報告(平成 22 年 3 月 9 日、ひとはく)
などを行った。

■ マーケティング タスクフォース

(1) ひとはく事業実施に関わる企業との連携

・館員諸氏の日頃からの熱心な連携活動がひとはく手帖広告協賛企業・団体の拡大につながったと考えられる。

(2) 外部資金を活用したひとはく手帖広告協賛の募集による印刷資金調達

・目標の 150 万円を上回ることができた。

昨今の社会・経済状況から当初の目標達成は難しいと予想されたが、館員諸氏の尽力により、昨年度の額を超え、目標を達成することができた。募集要項の雛形を基にして、臨機応変に事業を進めたが、タイムスケジュール通りにスムーズに進行したとは必ずしもいえない。今後の改善点としては、募集様式の再吟味、原稿と協賛金銀行振り込みの締め切り期日を早めることなどがあげられる。また、団体・企業への広告協賛募集の呼びかけの範囲を館としてどのように考えるか検討する必要がある。

■ グローバル・プログラム タスクフォース

(1) 学術交流事業等の推進

・各研究員により海外学術機関との学術交流が進められた。

(2) JICA 研修等の受け入れ

・単発の JICA 研修をいくつか受け入れた。

2009.7 JICA 研修(11名): 収蔵庫見学, EnVision 環境保全事務所.

2010.2 JICA 研修(9名:チリ国環境教育関係行政官): 環境教育推進のための行政能力強化コース, NPO 法人こども環境活動支援協会.

(3) ボルネオジャングル体験スクール運営支援

・第 11 回ボルネオジャングル体験スクール(平成 21 年 7 月 28 日～8 月4日)が実施され、マレーシア・サバ大学およびラハダトゥ・サイエンススクールとの連絡調整を支援した。出発直前にラハダトゥ・サイエンススクールで新型インフルエンザに罹患した生徒が出たため、最終的には同スクールとの交流プログラムだけを中止にして実施した。

・ボルネオジャングルの OB 会が神戸市内で実施され、今後、スクール修了生全体の交流の発展につなげる一歩になった。

(4) 国際シンポジウム等の実施支援

・年度当初、恐竜・化石タスクフォースと数度の検討会議をもったが、国際シンポジウムの来年度開催がなくなったので、その後の合同検討会議は中断し、詳細は恐竜・化石タスクに預けることとした。

■ ジオ・パーク タスクフォース

(1) 山陰海岸世界ジオパーク認定への支援

・世界申請候補として認定された。

(2) 山陰海岸ジオパークの運営支援

・申請書に盛り込まれた運営組織図内に「ひとはく」の存在が明記された。自然研(コウノトリの郷公園)にジオ環境研究部門が設置された。

(3) HP の立ち上げ等により、ひとはくにおける山陰海岸ジオパークへの支援活動をアピール

・HP はまだ立ちあげられていないが、ガイド養成や個々の学習プログラム内で、ひとはくの存在をアピールした。

(4) 山陰海岸ジオパークにかかわる、ひとはくの活動を実施

・十分とは言えないが、22 年度には 10 のプログラムがノミネートされている。

前年度落選した「世界ジオパーク申請候補」に再度申請し、日本代表に認定された。また、運営に関する委員やガイド養成などの講師として参画し、地域への支援を継続している。ジオパーク内における活

動は地域主体で、「縁の下の力持ち」的な活動が多く、「ひとはくの活動」として一般市民に浸透するには至っていない。

世界ジオパーク認定に向けて、県民局と協力するとともに、今後はガイド養成などの世界認定への取り組みだけではなく、その後をにらんだ定常的なセミナー、キャラバンなどを開催していく。ジオ環境研究部門(≒ひとはく)主催の定常的なセミナーやキャラバンを実施し、世界認定後をにらんだ活動を展開していく。ひとはく手帖掲載のセミナー類を、ジオパーク推進協議会と共催で実施する。

■ 地域再生人材創出 タスクフォース

(1) 文部科学省科学技術振興調整費新規課題「地域再生人材創出拠点の形成」の準備

・兵庫県立大学学長ファンドを獲得し、金沢大学、鹿児島大学、岐阜県立森林文化アカデミーなどの先進事例の視察を行い、文部科学省科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」への申請を行った。

(2) 兵庫県、豊岡市、丹波市、篠山市等関係自治体、地元企業、NPO 等と連携した人材養成プログラムの開発

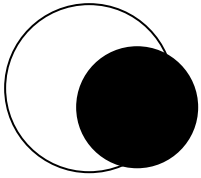
・主に兵庫県ビジョン課とともに、地域再生人材に関わる研究会を催すとともに、アンケート調査などを行い、地域再生に資する人材像について検討を進めた。

(3) 豊岡(コウノトリ)、丹波・篠山(恐竜化石等)の重点地域化

・丹波地域に兵庫県立大学による山南サテライトの設置などの準備作業が進めた。

今年度は地域再生人材創出拠点の形成への申請を契機として、人材養成プログラムに関する基本的な考え方や重点地域における拠点形成の方向性などを整理するとともに、館員になるべく周知することで、基本的な情報の共有を図った。兵庫県ビジョン課とともに、地域再生人材に関わる研究会を催すとともに、アンケート調査などを行い、地域再生に資する人材像について検討を進め、特に丹波地域に兵庫県立大学による山南サテライトの設置などの準備作業が進んでいる。

次年度以降は、今年度に検討した基本的な方向性をベースとして、本格的な実践に向けて、推進体制や資金調達などを含めて、館全体を上げて展開していくことが課題である。



平成 21 年度事業報告

人と自然の博物館では、その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標は、いわば博物館の行動の指針となる大項目である。これが全部で 9 項目設けられており、それぞれに達成を目指すべき目標値(指標)が設定されている。そして、この中期目標の各項目の下位項目として「措置」が設定されている。措置では、中期目標の達成と博物館活動の活性化に資する具体的な項目について、その行動の方針と具体的な数値目標が設定されている。

次ページ以降の図表および解説は、中期目標の各項目に沿って、平成 21 年度の博物館の活動内容とその自己評価、および平成 22 年度の事業方針を整理したものである。また、中期目標を支える措置の項目については、それぞれについての目標値・実績・達成度(%)を示した。

なお、平成 14 年度から平成 18 年度の活動成果をふまえて、平成 19 年度に中期目標と指標および措置について、社会のニーズへの対応を考慮して修正を行った。平成 21 年度は、平成 19-20 年度の実績や達成状況、博物館の将来構想を吟味したうえで中期目標と措置の最終案を設定し、それに従って事業を進めた。

1 研究

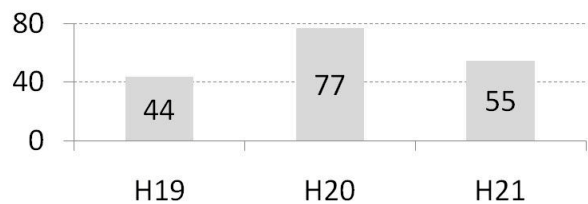
研究・
シンクタンク
推進室

兵庫から世界を対象に自然・環境に関する調査研究を行い、その成果を新しいプログラムやコンテンツ開発等の事業にフィードバックさせます。

1-1 学術論文数

学会等の査読を経て掲載された学術論文数

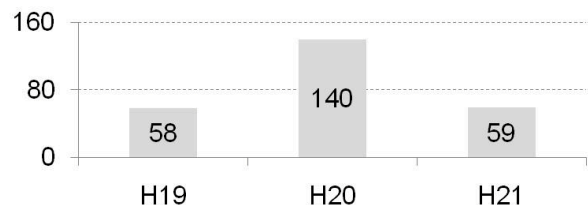
中期目標：40本/年
平成21年度：55本(138%)



1-2 一般向け著書数(総説・その他)

自費出版を除く一般向け著書, 雑誌・新聞等の執筆数

中期目標：80本/年
平成21年度：59本(74%)



平成21年度の取組みについて

全ての博物館活動の基礎となる「自然・環境」また「人と自然の共生」に関する研究を進め、その成果について研究員あたり最低年間1報を学会誌等で発表し、さらに一般市民向けの著書・新聞・雑誌等でもそのエッセンスを積極的に公表することを目標に掲げました。

平成21年度の達成状況と自己評価

学術論文の公表数は、目標値を上回りましたが平成20年度の7割の55報にとどまりました。一般向け著書等も20年度の半分以下の59報の公表で目標値に達することができませんでした。学術論文・一般向け著書数ともに、研究員による偏りがあり、最低限の目標が全ての研究員において達成されたわけではありません。

平成22年度の取組に向けて

最低限の学術論文また一般向け著書の公表が、博物館の総体として、また個々の全ての研究員においても達成されるよう努力を重ねることが肝要です。学術論文・一般図書等の20年度並の公表数を目標とします。研究環境改善のため、助成金の獲得にむけての情報を共有します。勉強会や個人研究・部門研究を推進し、さらに研究部横断的な課題に取り組む新たな「総合共同研究」の立ち上げを目標とします。

2 資料

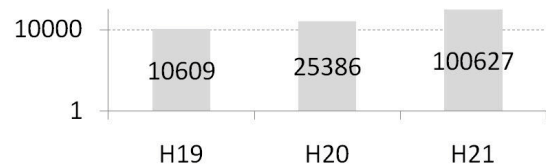
研究・
シンクタンク
推進室

質の高い特色ある資料の収集を行い、学術利用のみならず「演示」への利用を積極的に推進します。

2-1 資料の登録点数

「ひとく資料データベース」への年間登録件数

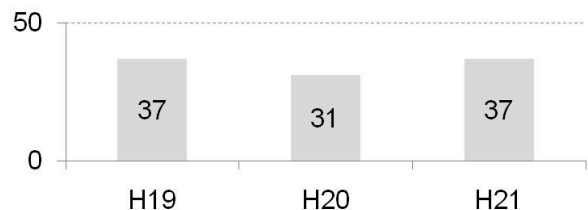
中期目標：10,000点/年
平成21年度：100,627点(1006%)



2-2 資料の利活用件数

資料の館外利用件数(貸出資料件数・館外展示件数)とマルチメディアデータ等の提供件数の合計

中期目標：50件/年
平成21年度：37件(74%)



平成21年度の取組みについて

収蔵資料および環境情報の収集・保存・利活用のシステム整備を行いました。資料収集方針に従った研究員自らの資料収集、県内外の自然史資料の受贈手続きを積極的に推し進めます。これらの資料や情報は利活用されて初めてその意義を発揮することから、登録件数だけでなく公開件数やその利活用の件数もその目標にあげました。

平成21年度の達成状況と自己評価

収蔵資料の登録点数は目標を大きく上回り、植物・昆虫標本を主として新たに10万点の登録を行いました。登録資料の一部は、地球規模生物多様性情報機構(GBIF)にデータを追加登録し、全世界で閲覧・利用できるようになりました。甲虫のホロタイプ18種(保科英人コレクション)など昆虫・植物コレクション10件、および篠山層群産獣脚類歯化石などその他のコレクション7件を受贈しました。ただ、博物館資料の貸し出し件数・館外展示・情報の貸し出し件数などの「利活用件数」は目標の74%で37件と、普及教育用の「演示」への活用は低調に終わりました。

平成22年度の取組に向けて

資料の収集・受贈・整理登録は、分野に偏ることなく継続します。博物館資料・環境情報の利活用件数を増やすため、情報のインターネットによる公開や、県民や専門家にとって魅力的なコレクションの充実を図ります。一方で、演示をはじめとする環境学習などに有用な教材となる「資料」の整備を進めます。また地域住民や行政にとって有用な資料・情報が利用されるように「広報」をはじめ「利用の仕組み」を整備します。

3 生涯学習の支援

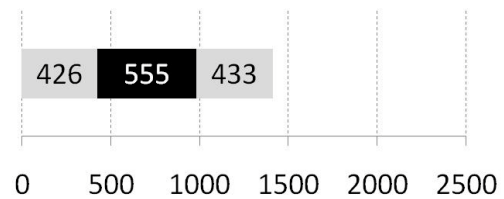
生涯学習課

「演示」手法を最大限に活用し、未体験者の来館と団体利用者の個人再来館を促し、参加者数・参加者層を拡大します。

3-1 ビジター数(総利用者数)

本館ビジター数、共催事業参加者数、館外展示観覧者数の合計

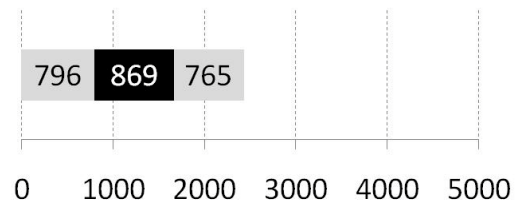
中期目標：2,500 千人/5年
平成21年度：433 千人



3-2 来館団体数

来館幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校、大学、一般団体数の合計

中期目標：5,000 団体/5年
平成21年度：765 団体



平成21年度の取組みについて

「ひとつは恐竜大作戦！」を展開する中で、春・秋の恐竜展示特別企画開催期間中にフロアスタッフによる新しいタイプのオープンセミナーや、夏休み中にも子ども向けのオープンセミナーなどを企画しました。団体向け、とくに学校団体向けには環境体験学習を中心に特注セミナーの講座数を増やして、積極的に広報を行い、年間に326講座を開催しました。夏季教職員セミナーでは、新しく教員免許状更新講習に対応したプログラムも企画しました。

平成21年度の達成状況と自己評価

ビジター数は昨年度比22%減の43.3万人にとどまりました。本館ビジター数も同17%減で17万人でした。新型インフルエンザの影響が大きかった一般団体は、昨年度比139団体減の412団体にとどまりましたが、学校団体は同35団体増の352団体の来館がありました。これは「丹波の恐竜化石発見・発掘」の効果がやや薄らいできているものの、小学校3年生の環境体験学習事業のなかでの研究員等による専門的な学習のニーズが増えてきていると分析しています。

平成22年度の取組に向けて

「ひとつは生物多様性大作戦！」の展開、夏休みからの展示特別企画を広く広報し、10月の「COP10」にあわせて、9月以降は団体向けの「生物多様性トーク」などで来館者増に努めます。学校向けの環境学習に対応した特注セミナーの充実、一般来館者向けのオープンセミナーの充実などにより、来館者に満足していただき、リピーターを増やす取組みを進めます。また、館外諸施設との連携を深めてビジター増に繋がります。広報に関する館内連絡会議を定期的に行い、関係部署の連携を密に図り効果的な広報を展開します。

3 生涯学習の支援

生涯学習
推進室

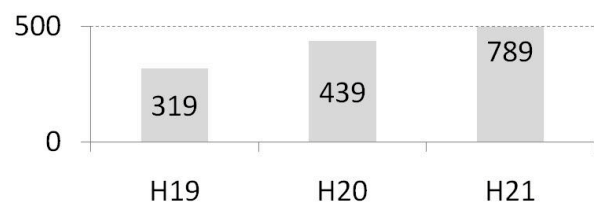
段階的・連続的な学習プログラムを提供し、地域研究員・連携活動グループを育成します。これらの「担い手」や他団体との連携を促進し、博物館事業の拡大を図ります。

3-3 地域研究員・連携活動グループ登録者数

地域研究員と連携活動グループ登録者数の合計

中期目標：500人(H23時点)

平成21年度：789人(158%)

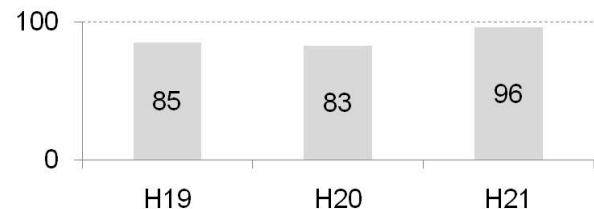


3-4 他団体との連携プログラム数

共催事業、協力事業、後援事業、館外展示件数の合計(地域研究員・連携活動グループによるものを含む)

中期目標：100件/年

平成21年度：96件(96%)



平成21年度の取組みについて

共生博物館地域研究員養成事業として第4回「共生のひろば」を開催するにあたり、従来の発表会に加えてポスター・作品展示を企画展示室で行う「共生のひろば展」を約二か月間実施し、市民による調査・研究・活動の成果の発表の機会を拡充しました。また、「共生のひろば」を神戸大学との連携によるJST助成事業「地域科学技術理解増進活動推進事業『地域ネットワーク支援』」の一環として開催し、外部資金の導入を図りました。

平成21年度の達成状況と自己評価

「共生のひろば」発表会には、発表者と聴講者を合わせて300名の参加があり盛況でした。「共生のひろば展」は、長期にわたって作品展示ができ、出展者に好評でした。新規登録は地域研究員4件、連携活動グループ2件とやや低調でしたが、他団体との連携プログラム数は共催44件、協力26件、後援4件、館外展示10件で、このうちひとつは連携活動グループとの協働プログラムは10件と、充実しつつあります。

平成22年度の取組に向けて

地域研究員養成事業は、昨年度に引き続き「共生のひろば」発表会および「共生のひろば展」を、内容のさらなる充実を図りながら実施します。また、COP10の開催に合わせて、JSTの『地域ネットワーク支援』事業を活用しながら、生物多様性に関する県民・市民ネットワークの形成に向けた活動を進めます。県民・市民グループの活動のさらなる活性化と、グループ間の交流の円滑化を図ります。

4 シンクタンク活動の支援

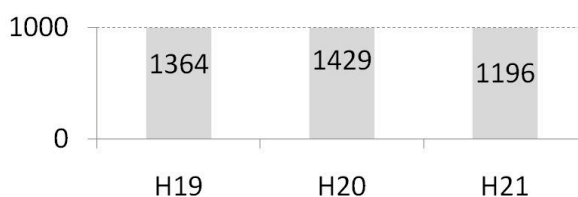
研究・
シンクタンク
推進室

自然・環境に関する県政課題に対して、適切な助言や提言等を行います。また、企業や行政団体等のニーズに応え、先駆的な調査研究を積極的に受託します。

4-1 県政・市町行政に対する貢献度

国・県・市町関連の委員会及びプロジェクト参画数

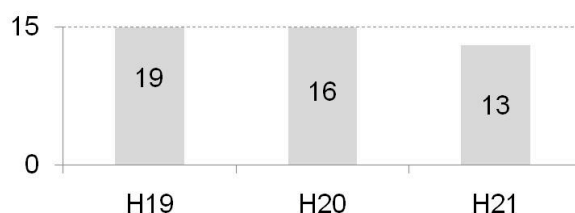
中期目標：1,000 件/年
平成 21 年度：1,196 件(120%)



4-2 受託研究件数

調査研究受託契約件数

中期目標：15 件/年
平成 21 年度：13 件(87%)



平成 21 年度の取組みについて

県・市また国関連部局の委員会・審議会等への学識経験者としての参画数 100 件、県職員等の来館相談目標数を 1,000 件に設定しました。関連部局・施設、また企業とともに地域の問題を解決する受託研究の目標獲得件数を 15 件に設定しました。

平成 21 年度の達成状況と自己評価

博物館研究員の県政関連の委員会・審議会等への学識経験者としての参画数は 277 件にのぼり、それに関連して博物館に来訪する県職員等関係者の来館は 987 名で目標をほぼ達成しましたが 20 年度の 1,429 名を大きく下回りました。受託研究はここ数年漸減傾向で、21 年度は 13 件と目標を下回り、総額も 939 万円に減少しました。

平成 22 年度の取組に向けて

博物館の各種の事業が行政施策また県民の活動に生かされ得る第一段階は達成していますが、実際に県政の遂行また県民グループの活動により有効に作用させる必要があります。COP10 の開催に合わせ、生物多様性兵庫戦略の地域での具体的な活動を推進し、その財政基盤の確保として、受託研究の獲得目標を前年度の五割り増し、1,500 万円とします。

5

マーケティング・マネジメント

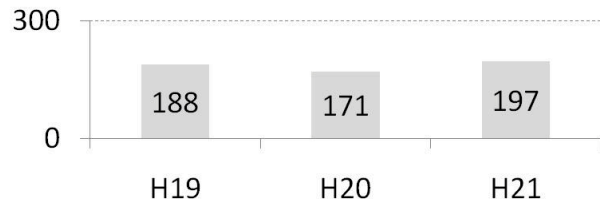
企画調整室

情報化社会に対応した情報提供を拡大し、広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を高めます。

5-1 ホームページアクセス件数

ホームページに対するアクセス件数

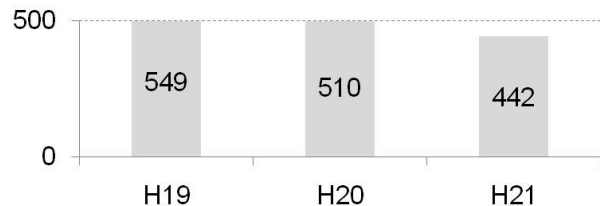
中期目標：300千件/年
平成21年度：197千件(66%)



5-2 メディア等出演件数

新聞・雑誌等記事掲載件数、テレビ・ラジオ等への出演件数の合計

中期目標：500回/年
平成21年度：442回(88%)



平成21年度の取組みについて

今年度は「ひとはく恐竜化石大作戦！」と称して、各事業を「恐竜化石」をテーマに実施しました。ホームページは、更新回数を増やすこと等によって、皆さんに博物館の存在を知っていただくよう(知名度の向上)に努力しました。

平成21年度の達成状況と自己評価

「恐竜化石」に関連した新事実の発表や恐竜展示特別企画、イベントなどが新聞に掲載され、テレビで報道されたりしましたが、それらのメディア等への出演件数は目標値に達しませんでした。しかし前年度と同様に知名度は確実に上がっていると思われます。ホームページのリニューアルを行い、更新件数(変化)も増えた結果、前年度よりもアクセス件数が増えましたが、目標には到達しませんでした。

平成22年度の取組に向けて

引き続き、「恐竜化石」に関する事業を展開することで、知名度の向上をはかりたいと考えています。また、平成22年は国際生物多様性年です。ひとはくのテーマを「生物多様性」とし、COP10(生物多様性条約締結国会議)の隣接会場へ出展し、生物多様性に関連するセミナーや体験型ツアーを行うなど、各種メディアに取り上げていただける事業を展開して行きたいと考えています。また、事業の報告などをホームページの「ひとはくブログ」(館員からの情報)などで発信するように館員に促していきたいと考えています。

5 マーケティング・マネジメント

企画調整室

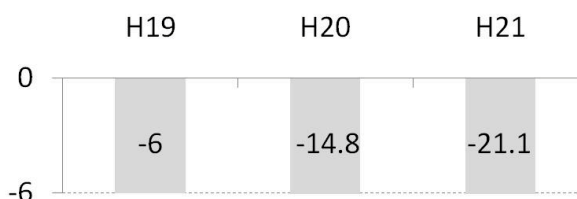
効率的で健全な博物館運営を目指します。

5-3 二酸化炭素排出量の削減

対平成 18 年度比での削減率

年度目標：-6%(H18 年度比)

平成 21 年度：-21.1%

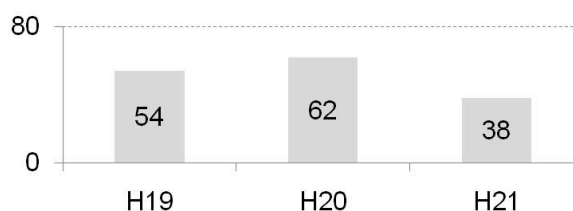


5-4 中期目標の達成度

中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合

年度目標：80%

平成 21 年度：38%



平成 21 年度の取組みについて

第 2 期中期目標の 3 年目の年度です。前年度に、「目標値の設定」を見直して正式版の中期目標を確定させています。継続して行っている事業を通じて多くの方に博物館の活動を知っていただくのはもちろんですが、特に、協力協定を締結した自治体や施設との連携を進めて行くことで、それぞれの地域の方々に知っていただく努力をし、地域の方々の協力のもとにメディアにも取り上げていただくようにしました。

平成 21 年度の達成状況と自己評価

電気、水道、ガスの使用量から算出する二酸化炭素排出量は、前年度よりも、さらに削減ができました。しかし、中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合(達成度)は 38%であり、前年度よりもさらに減ってしまい、年度目標には到達できませんでした。中でも「一般向け著書(総説・その他)数」や「ビジター数(総利用者数)」、「来館団体数」、「ホームページアクセス件数」などは低調であったため、特に対策が必要だと考えています。

平成 22 年度の取組に向けて

来年度は、第 2 期中期目標の 4 年目となります。今期の目標値の達成に向けての対策だけでなく、次期中期目標の策定に向けての検討をはじめたいと考えています。